

技能統合型の活動を授業に取り入れよう

—ディクトグロスの活用法—

鈴木 渉

1. はじめに

新学習指導要領では、中学校・高等学校ともに、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の4技能を総合的に育成するための技能統合型の活動を通して、コミュニケーション能力を育成することが求められるようになりました。先生方は、どのような技能統合型の活動をされているのでしょうか？例えば、読んだり聞いたりして理解した内容を基に、意見をまとめ、レポートを書くというような活動を行っているのでしょうか。または、興味のあることを調べさせ、それをレポートにまとめるというような活動などもされているのかもしれませんが、このような活動に対して、現場の先生からよく聞かれるのは、「高度な英語力が必要」、「普段書きなれていない生徒には難しい」ということです。本稿では、英語力がまだ十分ではない生徒や普段から英語で書くことに慣れていない生徒にも活用できる技能統合型の活動を紹介したいと思います。

2. ディクトグロスとは

本稿で紹介したい技能統合型タスクは、「ディクトグロス(dictogloss)」というものです。お聞きになったことはあるでしょうか。「ディクテーション(dictation)なら聞いたことはあるけれど…」という方もおられるでしょうし、実際に授業で使っているという方もいると思います。簡単に言えば、まとまりのある文章を聞いてメモを取り、そのメモを基に、文章を復元する一連の活動のことです。

北米を中心に海外の第二言語(外国語)教育では1990年代から注目されていましたが、日本でも2000年代から研究や実践が徐々に見られるようになってきました。日本で注目されるようになってきたのは、上述したように学習指導要領等で4技能を統合して指導する必要性が言われるようになり、ディクトグロスが、聞いて(話し合ったりしながら)、書くという、理解と表現のスキルを統合した活動で

あるからだと思います。さらに、ディクトグロスは、外国人を対象とした日本語教育や同時通訳の訓練等にも活用されています。

研究者や実践家によって細部は異なるのですが、ディクトグロスは基本的に、①文章を聞いてメモを取る、②文章を復元する、③復元した文章を使って何らかの活動を行う、という3つのステップを経ます。以下では、私の専門としている第二言語習得研究(Second Language Acquisition research: SLA)に基づいて、それぞれのステップごとに、どのように準備すればよいのか、実施する際の留意点は何かなどを中心に、まとめたいと思います。本稿が現場の先生方がディクトグロスを授業で活用するためのガイドラインになればと思っております。

ディクトグロスの3ステップ

- ① ・文章を聞いてメモを取る
- ② ・文章を復元する
- ③ ・復元した文章を使って活動を行う

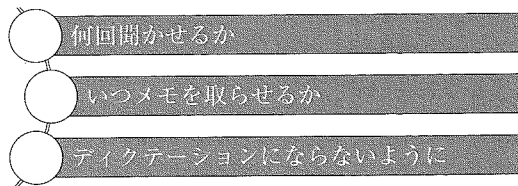
3. ステップ1

まず、生徒はまとまりのある文章を聞きながら、メモを取ります。文章を聞かせる際に、1回だけというよりは、2、3回聞かせることが多いでしょう。英語力によっては、3、4回聞かせないとメモを取れないという場合もあるかもしれません。さらに、実践では何度も聞かせると生徒の集中力が落ちるからということで、1回しか聞かせないということもあります。

次に、メモの取らせ方ですが、文章を複数回聞かせる場合は、1度目はメモを取らずに全体で何を言っているのかを把握させてから、2度目にメモを取らせることが一般的です。もちろん、2回ともメモを取らせるという場合もあります。実践に移す際は、すべてを書き取るディクテーションにならないよう

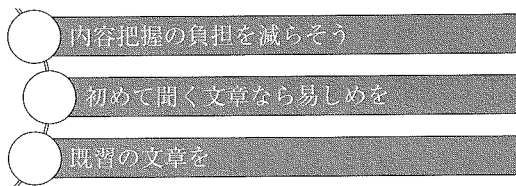
に、読む回数やメモの取らせ方を工夫する必要があるでしょう。

聞いてメモを取らせる際の注意点



ディクトグロスを実践する際、上述以外で考えなければならないことはいくつもありますが、とりわけ、リスニング教材のレベルが重要です。当然ですが、まず聞き取れないと、復元できないからです。そのため、聞き取るリスニングの語彙や文法をできるだけ簡単にすることが大事になってきます。1つの方法としては、学習者の現在のレベルを(i)とすると、それより低いレベルの教材($i-1$, $i-2$, $i-3$ ……)を利用するということが考えられます。例えば、高校2年生を担当されていれば、中学2、3年生用のリスニング教材を利用するというようなイメージです。

リスニング教材の選定上の注意



もう1つ考えられているのは、初めて聞く文章ではなく、『コミュニケーション英語』等の授業で十分に内容を把握した文章をリスニング教材に利用するという方法です。内容を理解していますので、学習者は語彙や文法を聞き取ったり、メモしたりするほうに集中することができるようになると思われます。初めて聞く文章だと、そのレベルにもよりますが、話された内容を把握するのに精一杯で、語彙や文法までは注意を向けられず、メモを取ることができなくなるでしょう。

ディクトグロスを困難にしているもう1つの理由は、聞きながら同時にメモを取らせるということにあります。我々は普段日本語で何気なく聞きながら

メモを取るという活動を行っていますが、英語で行うのはハードルが高い活動になります。ですから、メモを取る困難さを軽減してあげることが大事になってくるのではないのでしょうか。1つの方法としては、聞かせる際に、ある程度の意味のまとまり(例えば2、3文)で1度止めて、学習者にメモを取る時間を与えるということが挙げられます。先ほど述べましたが、区切る単位があまりにも短いと、すべて書き取ってしまうディクテーションになってしまいますので、あくまでメモになるように心がける必要があります。

もう1つの方法は、メモを取るためのヒントを与えるということです。例えば、下記のように、教師のほうであらかじめメモしてほしいポイントなどを表にまとめておいて、メモを取りやすくすることが考えられるでしょう。この表を基に、生徒は文章を復元することになります。

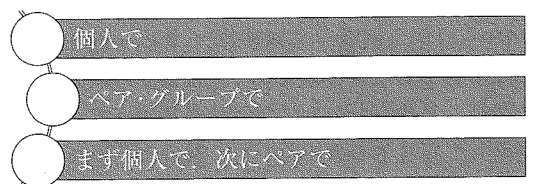
メモを取りやすいように工夫しよう

名前	特徴	結婚していたら?
Noriko	料理得意	美味しい料理食べられた
Sayaka		
Maria		
Natsue		
Atsuko		

4. ステップ2

メモを取り終わったら、メモを基に、聞いた文章をできる限り元どおりに復元させるというプロセスを経ます。この文章復元ですが、個人で行う場合もありますし、ペアやグループで行う場合もあります。また、1度個人でやってみてから、それを持ち寄って、ペアやグループで完成させるという場合もあります。

文章復元の際のバリエーション



ここで注意しなければならないのは、ペアでやらせる際に、どのようにペアを組ませるべきかではないでしょうか。ペアやグループ活動ですから、お互いに関わり合って助け合うというのが大前提です。しかし、復元作業をペアでやらせる際に、残念ながら、1人の生徒だけが書いて、もう1人は見ているだけで何もしないということがよくあります(ただ、何もしていない生徒が観察から何も学ばないということではありません)。また、最初のパラグラフは生徒Aが、次のパラグラフは生徒Bがという風に分業制にして復元するという「共同」作業も目にします(完全分業制も共同作業と言えますが、本稿では「協同」作業とは別ととらえています)。このようなペア活動では、ただ単に2名以上の生徒が個別に作業をしているだけで、真の意味での関わり合いや助け合いとは言えないでしょう。

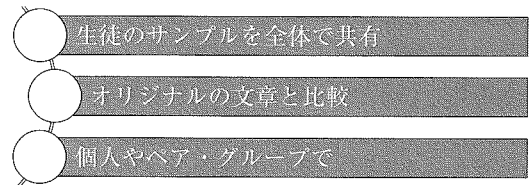
それでは、どのように関わり合わせればよいのでしょうか。これまでのSLA研究にそのヒントがあります。SLA研究では、ペアワークを①助け合う・教え合う・協力し合うペア(協同)、②自分の意見を主張するばかりで相手を受け入れず、協力し合わないペア(支配的-支配的)、③1人が独断で行い、もう1人は従うペア(支配的-消極的)、④知識のある1人がリードするものの、まだ十分な知識がないもう1人を積極的に参加させようとするペア(専門家-初心者)、に分類することがよくあります。そして、これまでのSLA研究では、「協同型」ペアと「専門家-初心者型」ペアが、コミュニケーション活動の達成度合いにより影響を与えることや、コミュニケーション能力の発達に有益であることが示されています。

それでは、「協同型」や「専門家-初心者型」のような生徒同士の関わり合いをもたせることができるようにするためには、どうしたらよいのでしょうか。簡潔に述べますと、教員が日ごろから生徒同士の関わり合いに対する意識を高め、理解を深めておくことはもちろん、ペアワークやグループワークを行う前に、生徒に「他者との関わり方」を教える必要があるのかもしれませんが、そうすることで、学習者が共通の目標をもち、お互いの貢献を価値のあるものと認めることができ、協同型のペアやグループワークが達成できると思われれます。

5. ステップ3

復元後に、教師は生徒のサンプルをいくつか挙げて、語彙や文法の共通する間違いを指摘して説明したりします。例えば、現在完了形が含まれる文章を用いたディクトグロスをしたのであれば、生徒の代表的な間違いを挙げながら、現在形と現在完了形の違いに関する文法説明をするということが考えられます。また、オリジナルの文章を配布したり、教師やALTだったらこう復元するというモデルを見せたりしながら、生徒自身が復元したものと見比べさせるという場合もあります。もちろん、文章復元のステップと同様に、個人でやらせてもいいですし、ペアやグループでやる場合もあります。

文章復元後のやり方



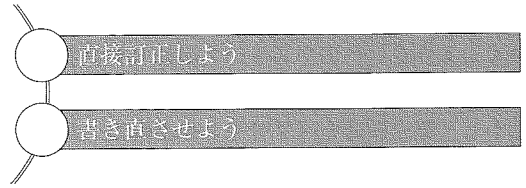
全体で共有したり、オリジナルの文章と比較したりすることで、「この単語のスペルはこうだったのか」、「ああ、現在完了形のルールはこうだったなあ」などと考える機会を学習者に与えることになり、そのような機会が英語学習につながるものがSLA研究では示されてきました。

最近のSLA研究に基づいて、先生方にお勧めしたいことが2つあります。まず、生徒が復元した文章を訂正するという事です。文法説明を見たり聞いたり、オリジナルの文章と比較したりするのでは、復元した文が正しいのかどうかの判断は生徒自身に任せられることになります。自分自身で学習に責任を持つことは自律的な学習者を育成するという意味では重要なことですが、SLA研究では、「オリジナルの文ではそうになっているけれど、自分の書いたものはダメなのか」、「文法説明はわかったけれど、自分の書いたものが正しいのか自信がない」などと学習者が不安を抱くことがわかっています。ですから、スローラーナーや書くことに慣れていない学習者には、教師が間違っている箇所を正しく直してあげれば、「自分はこう書いたけどダメなんだな」「こういう風に直されているってことは自分が覚えていたル

ールは間違っているんだな」と理解することができません。手前味噌で恐縮ですが、私の研究でも、文法説明をするよりも、復元した文章を直接直してあげるほうが、英語学習につながるということがわかっています(Shintani, Ellis, & Suzuki, 2014; Suzuki, Leis, & Itagaki, 2014)。生徒の書いた文章を直すことは骨の折れる作業ではありますが、その効果はSLA研究で確実に示されていますので、ぜひトライしてみたいかでしょうか。直接直して答えを与えることに抵抗がある場合は、最初は直接的に直してあげて、徐々に下線等を用いて間違いの位置を指摘し修正は生徒自身にさせるようにしてあげれば、自律的な学習につながることもSLA研究では示されています。

近年のSLA研究に基づいてもう1つ工夫しているのは、文法説明やオリジナルと復元した文章を比較させるだけではなく、生徒に復元した文章を書き直させるということです。これまでの研究や実践では、フィードバックを与えた後に確認させるだけで、書き直しをさせるということはあまり行われてこなかったように思います。特に実践で気をつけなければならないのは、生徒が赤ペンで斜線が引かれているものだけを見て、すぐグチャグチャにして机やカバンの奥にしまってしまうという最悪のパターンです。間違いに赤を入れられているのを見て、「やっぱり英語を書くのは苦手なんだ」「やっぱり書くのは嫌い」というネガティブな感情を助長してしまう可能性があります。文法説明、オリジナルの文章、フィードバック後に、生徒に書き直しをさせてみてください。もちろん、文法説明やフィードバック後ですから、より正しく書き直せるようになり、自信につながると思われます。上述した私の研究でも、文法説明やフィードバック後に書き直しをさせるほうが、文法説明やフィードバックを与えるだけよりも、英語学習を促進することがわかっています。書き直しをすることは英語学習の大事なプロセスだということを再認識したいものです。

近年の研究に基づく新たな工夫



6. 終わりに

ディクトグロスの話をする、「復元は自然なライティングと言えるのか?」、「ディクトグロスよりは生徒の考えや思いを書かせたい」という批判や意見を受けることがあります。確かに、ディクトグロスは自然なライティングとは言えないでしょう。しかし、書くことに抵抗を感じている学習者、書くことに慣れていない学習者、英語力が十分ではない学習者にとっては、導入しやすい活動だと考えます。それだけではなく、ディクトグロスの学習効果もSLA研究では広く実証されているのです。紙面の都合上詳細は割愛しますが、復元作業をすることで、「書きたいこと」や「書ける」とギャップに気づいたり、自分の英語知識について深く考えたりするようになります。このようなプロセスは英語学習において最も重要だと考えられているのです。明日から技能統合型のディクトグロスを実践してみませんか。

引用文献

- Shintani, N., Ellis, R., & Suzuki, W. 2014. "Effects of written feedback and revision on learners' accuracy in using two English grammatical structures." *Language Learning* 64, 103-131.
- Suzuki, W., Leis, A., & Itagaki, N. 2014. "An investigation into effects of feedback through grammar explanation and direct correction in second language writing." *ARELE* 25, 49-63.

(宮城教育大学准教授)